平等院、富岡製糸場、三陸鉄道、佐渡島、奥飛騨温泉郷など ひとり旅

旅行読売

2014 9

定価510円

昭和34年6月29日第3種郵便物認可 通巻795号
2014年9月1日発行（毎月1回1日発行）

オトナの旅の道しるべ

走り出せば景色一変
サイクリングへGO!

全国各地へ旅気分
東京ふるさとショップ

ふらっとあの町へ……
ひとり旅

特別付録
くしろパスポート

[写真]平等院

17音のたより

MAYUZUMI 30 MADOKA

黛まどか

スペインのハポンさん②

「慶長遣欧使節団」出帆400年を記念して、昨年の夏、仙台の合唱団「萩」がスペインのコリア・デル・リオ市からハポンさんと地元の合唱団コロ・サンタ・マリア30名を日本に招待した。そして一週間に亘って「俳句と合唱でつなぐ日西文化交流」を催した。使節団の目的であった貿易交渉等は成立しなかったが、一行が遥かスペインの地に残してきた友好と文化の種は400年の時を経て、宮城の地で花を咲かせようとしていた。

夏の終わりに、コリア市の一行は日本にやって来た。ほとんどの人が初めて踏む日本の地だ。石巻では使節団が出帆した月浦を訪ね、夜は灯籠流しに参加して、合唱と鎮魂句を灯籠に添えた。そして、ハポンさんたちは石巻の被災者と俳句交流会の座を囲んだ。参加者の一人、太田美智子さんとは震災直後に石巻の避難所を慰問した折に出会った。避難所のリーダーだった太田さんは毎日の朝礼で、差し入れた編著から一句と解説を読み上げられたそうだ。「一句一句がそれぞれの被災者の心に添い、どれほど励まされたかわかりません」と太田さん。

同じ避難所にいた女性が、津波で息子さんを亡くされ、ご遺体さえ見つからない不安な毎日を、被災者同士、肩を寄せ合い励まし合いながら過ごしたことを語り始めた。会場が水を打ったように静まり返った。震災から2か月後の母の日に、息子さんのご遺体は発見されたという。「親孝行の息子だったので、母の日のプレゼントだと思いました……」。その瞬間、ハポンさんの一人が手を挙げて即興で鎮魂の俳句を詠んだ。別のハポンさん、また別のハポンさん……全員が泣いていた。

艱難の水もやがては澄む水に
マルタ

魂をひとつに一期一会かな
ホアン・フラン

ぬばたまの闇くぐり抜け桜咲く
ガブリエル

（原文はスペイン語）

最後は言葉はなかった。ただただ抱き締め合って俳句交流会は終わった。

人相寄れば流灯の相寄れる

イラスト　上原由祈子

まゆずみ・まどか

俳人。2002年「京都の恋」で第2回山本健吉文学賞受賞。オペラ「万葉集」「滝の白糸」（作曲：いずれも千住明）の台本執筆など俳句の枠を超えて幅広く活躍。最新刊のエッセイ集「うた、ひとひら」（新日本出版社）が好評発売中。

※日本という意味の姓を持つ日系スペイン人のこと　「スペインのハポンさん」は次回、最終回です。